
魔法戦記リリカルOO～不滅の狙撃手～

チョコレートパフェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカル○○不滅の狙撃手

【Nコード】

N8973X

【作者名】

チヨコレートパフェ

【あらすじ】

成層圏の向こう側まで狙い撃つ男、コードネーム

『ロックオン・ストラトス』ことニール・ディランディ。

家族の仇であるサーシェスとの戦いで命を落とした……はずだった。彼は新たな世界で目を覚ます。

そこで出会う一人の魔法少女。彼女と出会った時、ロックオンの新

たな戦いが始まる！！

作者の処女作です。ご都合主義、キャラ崩壊、原作ブレイクなどの要素を含んでいます。嫌いな人は回れ右で。

ブローグ

『よお、お前ら満足かあ…こんな世界で？』

こんな事を言ってもしょうがない、ましてや答えが帰って来ないことも解っている。

だけど……聞かずにはいらなかった。

両親を奪ったテロ。あんな事が当たり前に起こる世界で……。各地の紛争で人が次々と死んでいく。世界の人はそれを当たり前のように認識している。自分達には関係ないことだと。

自分達がよければそれでいいのかよ……………？

『…………俺は嫌だね』

死が近づいているのがわかる。

だけど自然と恐怖は無い。

咎は受ける、そう決めていたから……。

走馬灯のように駆け巡る人生……そのなかで思った。

何やってたんだろうな、俺……。

思えば復讐の事ばかり考えていた気がする。今更ながら、少し……いや、かなり後悔した。

世界を変える、世界の為といって結局はテロが……この世界が憎かったただけだ。

弟の、ライルの生きる未来を守るためといってソレストル・ビーイングに入ったが、結局は復讐するための力を手に入れる為だったのかもしれない。

もし、やり直せるのなら復讐じゃなくて何かを……守るために……
……………。

そう思った直後、俺は光に包まれた。

第1話 運命との出会い

朝日が目に当たる。時刻はまだ早朝、そんな時間にロックオンは目覚めた。

「あゝ、いつの間に寝たんだ俺？」

眠そうな目を擦りながらロックオンは呟く。まだ寝起きなのか意識があまり覚醒していないようだ。

とりあえず近くに川があつたので顔を洗おうと歩きだした。

「ずいぶん綺麗な水だな……」

顔を洗ってる途中のロックオンが呟く。

こんなに川の水が綺麗なんて……そうロックオンは思ったのだ。だんだん意識が覚醒してくるとロックオンは急に手を止めた。水面に映っている自分の姿を凝視し信じられないというような顔をしている。

「体が…縮んでる……？」

信じられないというようにロックオンは呟く。
なぜか体が小さくなっているのだ。

直に自分の体を見ても明らかに手足が短くなっている。

それどころか目の傷が消え視力も戻っている。眼帯もなくなっている。

「（あの眼帯……けっこう気に入ってたんだけどな……）」

そんな事を考えている内にロックオンはあることを思い出す。

「俺は…確か、あの時………」

顔を洗ったおかけでだいぶ頭がスッキリした。
だが、頭がスッキリしたことで思い出したのだ。

自分は死んだはずだと。どうして生きてるんだ？

考えても答えは見つからない。

百歩譲ってあの時生き延びたとしてここは何処なんだ？

ここには確かに重力がある。そして空気も……。

考えられるとすれば地球だがさっきまで宇宙にいたはずだ。そしてなぜ体が小さくなっている？

数々の疑問が浮かぶが答えはみつからない。

答えがみつからないならとりあえず情報を集めるのが先決だ。

彼は持ち前の前向きな性格からそう答えをだした。もともと考えるのはあまり得意じゃないのだ。

思い立ったが吉日。やる気をだして歩きだそうとしたとき……

……

ドォーン!!!!!!!!!!

「!？」

近くで爆発音がしたのだ。

ロックオンは何事かと音のしたほうへ走る。

「何!？」そこで見た光景は……

なんといえぱいいのか……怪物？ 化け物？

そんな言葉が似合いそうな不気味な生物。

その化け物と金髪の少女が空を飛んで戦っているのだ。

「おいおい、マジかよ……………」

思わずその光景に我が目を疑う。

人が空を飛ぶなど聞いたことがない。

しかもかなりのスピードだ。

人間が出せるスピードを遥かに越えている。

何やら電撃？らしき物も出している。

おとぎ話に出てくるような光景が目の前にあるのだ。

「なんだか…とんでもないことになってるみたいだな……………」

また貧乏くじか……………？

彼はため息を吐きながらそんな事を思っていた。

思考を引き戻して戦闘をみてる。

戦闘は明らかに少女が押している。

戦闘のプロの自分じゃなくてもそう思うだろう。

かなり戦闘なれしているのがわかる。複数の化け物の攻撃をかわし、攻撃を仕掛ける。

圧倒的なスピードで複数の敵を手を持った鎌みたいなものでなぎ倒

している。

彼女は近接戦闘が得意なのだろう。戦い方もどこか刹那に似ている。化け物はどんどん数を減らしていく。

ロックオンは見とれていた。

彼女の強さに。その美しい戦いに。

だがすぐに思考を引き戻された。なぜなら……………

「グアアアア!!」

「っ!!」

なんと、化け物がこっちを向いたのだ。そして猛スピードでこっちに向かってくる。

「っく!!」

とっさに回避動作をとったが間に合わない。

「危ない!!」

こっちに気づいた少女が猛スピードでこっちに向かってくる。

「バカ野郎、来るんじゃないやねえ!!」

だが彼女は止まらない。そのまま彼女は化け物の突進を受け止めた。だが彼女はそれで怪我をしたのか、腕から血が出ている。

「うつ…」

少女は痛そうに腕を抑える。

「おい、大丈夫か!？」

「大丈夫……です…」

ロックオンは少女に焦ったように聞くが少女は額に汗を掻きながら大丈夫だと答える。

「それより…早くここから離れてください」

そう言って少女は再び戦闘にもどる。

だが、先程までの少女と違い明らかに動きにキレがない。

当然だ。少女の傷は思ったより深いのか血を流しながら戦っている。彼女の顔色はどんどん悪くなっていくが、化け物のほうは疲れる素振りも見せない。

少女は次第に劣勢になっていく。

ロックオンはその光景を拳を握り締めながら見ていた。手からは血が滲んでいる。

目の前で少女が苦しんでいるというのに何もできない……。

そんな自分がどうしようもなく情けなくて、昔の…家族を奪ったテロが脳裏によみがえってきて……………

だが、自分には力がないのだ。ただ見ていることしかできない。

「（ちくしょう、また俺は何もできないのか…………？）」

ロックオンが自分の無力にうちひしがれていると、突然ポケットが光りだした。

「なんだ…………？」

ロックオンは唖然となりながらもポケットの中を探る。そして光っていたものを取り出した。

それはペンダントのようなもので緑と白を基調とし金色のV字マー

クが目を惹く。というかこの色は……

「デュナメス……？」

そうデュナメスの色とまったく同じだ。

『ようやく気づいてくれましたね、マスターロックオン』

「うおわぁー!!」

思わず大きな声を出してしまった。だが仕方ないだろう。デュナメスの色をしたペンダント？からいきなり声が聞こえたからだ。

「なんで喋るんだこれ！？ 通信機器かなんかなのか！？」

『違います。私はデバイスです』

「デバイス？」

ロックオンは聞き慣れない言葉に首を傾げる。その時ものすごい爆発音がした。反射的にそっちに振り向く。

目に映ったのは今にもやられてしまいそうな少女の姿だった。

「やべえ!!」

『マスターロックオン、彼女を助けたいですか?』

今にもやられてしまいそうな少女を心配しロックオンは叫んだが、いきなりデバイスに質問される。

「できんのか…?」

『はい。マスターロックオンが今から私が言うことをやってくれば』

それを聞いたロックオンはすぐに答えを返す。そこには一切の迷いもない。

「わかった。何をすればいい」

『簡単です。ただ、デユナメス、セットアップとってください』

それだけでいいのかと疑問に思ったようだが、

あえて聞かず静かに、しかしどこか力強さを感じさせる声でロックオンは言葉を紡いだ。

「了解だ。デユナメス、セットアップ」

直後、ロックオンは緑色の光に包まれた。

光が治まると緑と白を基調とした……デユナメスとまったく同じ色のバリアジャケットを身にまとっているロックオンが立っていた。

「これは……」

『説明をしなくても、わかりますよね？ 貴方なら』

「ああ、コイツはデユナメスとまったく同じだ……」

『そうです。私は、デユナメスですから』

GNスナイパーライフルになっているデユナメスがロックオンに言う。

ロックオンはその言葉に微笑を浮かべると、すぐにGNスナイパーライフルを構えた。

「（体が小さくて、なんかしまらねえが……）」

ロックオンはそう思いながら口癖になっている言葉を力強く言い放った。

「デユナメス、目標を狙い撃つ！！」

狙撃手は再び戦いに身を投じる。それはただ純粹に、守るための戦い。

第2話 ロックオン・ストラトス（前書き）

お気に入り登録をしてくださった方々ありがとうございます…。

作者の暇潰しの妄想作品ですが「こんななんあったな……」「ぐらいの
感じでよんでやってください

第2話 ロックオン・ストラトス

「そこっ！！」

「ぐぎゃあああああー！」

少女……フェイト・テストロッサは化け物の背後にまわり、そして切り裂いた。

彼女は高速戦闘のスペシャリストである。

まだ若いがその圧倒的なまでのスピードは後に『閃光』とまで呼ばれるようになる。

だが今の彼女はそのスピードをまるで活かしていない。
理由は腕の怪我にある。

フェイトはロックオンを庇い腕に重傷をおった。

その腕が痛くてスピードが出せないのである。

いくら実力は一流といっても彼女はまだ若い。

想定外の出来事：所謂『イレギュラー』がおきれば、実戦経験があまりにも少ない彼女にはきついだろう。加えて腕の怪我である。

痛みで戦闘に集中できず、徐々に追い詰められていく。

頼みの綱のアルフは今、別のところで戦っている。

アルフはこちらの異変に気づいたのかこっちに向かって来ている。

使い魔と主人のリンクでフェイトの異変に気づいたようだ。

アルフは体術にも長け、特にそのサポート能力はかなりのものだ。
アルフが来れば戦況は再び逆転する。

「（それまで…もちこたえないと……）」

フェイトはデバイス『バルディッシュ』を強く握り締めながら気
合いを入れる。

足下に魔方阵が浮かび上がり、魔力がバルディッシュに集中する。

彼女は雷の魔力変換資質を持っている。集中した魔力は徐々に雷に
変換されていく。

『サンダー……うつ！?』

しかし突如フェイトは苦しそうにその場に膝をつく。腕の怪我とそ
れが原因のダメージの蓄積もあるが、それだけが理由ではないだろ
う。

フェイトはここ数日戦いの連続だ。そのうえ食事をともに摂って
いないのだ。いつ、動けなくなつたとしてもおかしくないのだ。

彼女は苦しそうに顔を歪めるがそこに……………

「フェイトーっ！……！」

「アルフ!!」

彼女の使い魔、アルフが駆けつけたのだ。

フェイトは嬉しそうに声をあげるがそこに……………

「フェイトっ!! 後ろっ!!」

「えっ…………?」

化け物が一斉に襲いかかったのだ。フェイトの気を抜いた瞬間を見逃さなかったのだ。

割りと頭の良い生き物なのだろう。

「くっ!!」

フェイトはかわそうとするが……………、

「くっ…………!!?」

体が動かないのだ。

化け物はそんなことお構い無しにフェイトに牙を剥く。
フェイトはなんとか動こうとするが、体が何かに取りつかれたかのように動かない。今は飛んでいるのもやっとの状態だ。

「グギヤアアっ!!」

「フェイトっ!!」

アルフがなんとか追い付いて防御しようと必死に走っている。だが駄目だ。

間に合いそうにない。

フェイトは諦めたかのように脱力した。

アルフは間に合いそうにないし、自分はまったく動けない。

フェイトはアルフに顔を向けると笑顔で言った。

「今までありがとう……アルフ……。それと、ごめんね……」

アルフに笑顔で、しかしかなり無理をした、そんな表情でフェイトはアルフに笑顔を向けている。

その表情からはアルフへの申し訳なさ、初めて感じる死への恐怖など様々な感情が映っている。

だが彼女は、死の寸前で……恐怖や悔しさよりも……感謝をとっ

た。

今まで一緒に頑張ってくれて、彼女を支えてくれた相棒への感謝をとったのだ。

そして、謝罪した。

母のためとはいえかなり無理をさせてしまった。

そして…自分が死ぬことでアルフが悲しむことへの謝罪。

アルフはその言葉を聞いて涙が溢れ出した。

自分の主人が……というよりも自分にとって妹のような、何よりも大事な存在の命が……今にも消えようとしている。

アルフにも悔しさや自分への怒りなど様々な感情があつたが、何よりもフェイトと離れたくない、フェイトを失いたくないといった感情が大きかった。

「フェイトオオオオっ！！！」

アルフはありつたけの声で叫ぶ。
叫んでも状況が変わるわけでもない。だけど叫ばずにはいられなかった。

手を延ばしても全く届かない。

だけど何度も何度も手を延ばす。

フェイトにもアルフにもこの時間がまるでスローモーションのよう

に流れているのを感じた。

フェイトはみた。アルフの顔を。
涙でぐしゃぐしゃになっている。

その顔を見ていると、罪悪感が沸いてきた。

そして、思い出す。

母、プレシアの笑顔も。

もう一度優しく笑いかけてほしくて、優しい母に戻ってほしくて……
ただ一生懸命戦ってきた。

母のことを、アルフの顔を思い出すと、死にたくなってきた。
覚悟とは脆いものである。

死にたくないと思うと、どうしようもなく恐くなってきた。

しかし現実残酷だ。

そんなフェイトの覚悟など知る由もない。

そして今まさに一匹の化け物の牙がフェイトを引き裂こうとしたとき……

ビシュウウン！！

ドオオン！！！！

「ギャアアアア！！？」

「…………えっ？」

アルフの横を桃色の閃光が通り抜け……化け物をあつという間に貫いた。

化け物は悲鳴をあげ絶命する。

フェイトは見た……そこには、力強い眼で化け物に狙いを定めている………ロックオン・ストラトスの姿があった。

「連中が相手だと、ハンティング気分だぜ……」

彼はそうぼやきながらも息もつかせぬ射撃で次々に化け物を倒していく。

化け物はあまりにも正確無比な射撃に声も出せないようだ。

「あれは……………？」

アルフはそう呟きながら、へなへなと尻餅をつく。

アルフはロックオンの事をピンチに駆けつけたヒーローだと思った。
それほどさっきのタイミングが劇的過ぎるのだ。

「…………ラストだー!!」

そう言つてトリガーをひく。

化け物は跡形もなく爆発した。

ロックオンは全ての化け物を倒しおえると疲れたかのようにため息を一つ。

「ふうっ…、なんとかなつたな…………」

そう言つて安心したのも束の間……………なんとフェイトが、力を使い果たしたかのように落下してきたのだ。
おそらく緊張の糸が切れたのだろう。

ロックオンは一瞬焦るが、すぐに冷静になり…………

「飛べるな？ デュナメスー!!」

『無論ですマスター』

そのやり取りの後、GNスナイパーライフルをGNビームピストルにし

ロックオンはフェイトの元へ走り出した。

走っている間に飛ぶイメージを作り、一気に空へと飛翔した。

何故か飛んだ時にGN粒子が出てきた。

いや、デユナメスそのものなのだから別に不思議じゃないだろう。

GN粒子の恩恵もあり、彼女の真下へと高速で移動し、そのままゆつくりと抱き抱えた。

「ギリギリセーフってとこだな……」

「あなたは……？」

「ロックオン・ストラトスだ。大丈夫か……？」

フェイトは戸惑ったように聞くが、ロックオンは笑顔で返した。その笑顔は、心底無事でよかったという笑顔である。

「はい……ありがとうございました」

「何いってんだ……？」

俺のほうこそ助けてくれてありがとうよ」

若干赤くなっている顔でフェイトはお礼を言った。

しかしロックオンはまたも笑顔で返した。

二人はとても優しい性格である。

事情がなければ人を傷つけたり、こんな戦いをすることは拒む筈だ。だからこそ自分よりも他人を心配するのだ。

ロックオンはゆっくりと揺らさないように降りていく。

バリアジャケットの背中からはGN粒子が出ている。

そのGN粒子を浴びているフェイトは……

「温かい……………」

そう言っただけで安心したように意識を手放した。

ロックオンは少し戸惑ったが…笑顔で嬉しそうに、安心したような表情で寝息をたてている彼女を見て、

ロックオンもつられて笑顔になった。

下からこの光景をアルフが見ている。

GN粒子を纏いながら降りてくるロックオンと、その腕のなかで安

心したように眠っているフェイト。

フェイトのあんな顔…本当に久しぶりに見たような気がする。

「ハハッ…」

アルフも釣られて笑顔になった。

朝日に照らされた二人はとても綺麗で幻想的に見えた。

第3話 新たなる一步

空中…といっても地上から10メートルくらいだろうか、ロックオンはフェイトを抱き抱えながらゆっくりと地上に降りた。

長い茶髪が風になびいている。

見た目が子供なのにすごく大人っぽく感じる。

「なんか……結構疲れたな……」

ロックオンは呟く。

そのロックオンの問いに反応したのか首にぶら下げているペンダント…デュナメスがロックオンに説明する。

『マスター、それは貴方が魔力を大量に使ったからです。魔力を使つての初めての戦闘ですから疲れるのも無理はありません』

「魔力………?」

『さっきの力のことです。貴方は魔力を消費し魔法を使つて戦つたのです』

「魔法か……、そんなものファンタジーの中だけだと思ったぜ……。けどだいたいわかったぜ、魔力つーのは無限じゃなくて、使いすぎるとツケが体に来るってことか……」

「その通りです。ですが私はデユナメスがデバイス化した物ですから戦い方はすぐにわかったようですね……。さすが元ガンダムマイスター」

「なあ……お前は本当に……」

「ええそうです。私は貴方のそばですと戦っていました。しかしなぜ私がデバイスになったかはわかりません。』

「そうか……。あ……そういえばデバイスって？」

『魔力を行使するのに必要な武器みたいな物です。セトアップの声と共にバリアジャケットが展開されます。デバイス……つまり私がないと戦えないので注意してください』

「了解だ……」

そこで会話は途切れた。

ロックオンはとりあえず抱き抱えているフェイトを背中におぶる。

彼女はいまだに気持ち良さそうに寝息をたてている。

起こさないようになるべく動かないようにしている。

体が小さくなっていて、彼女とあまり体格が変わらないのに何故か楽に背負える。

少し疑問に思ったが今はこっちのほうが先だと思考を戻し、デュナメスに話しかけてみた。

「なあデュナメス……これからどうすればいいと思う?。」

デュナメスは少し間が空いた後、言葉を返した。

『……私達は今、どういう状況にたたされているかよくわかりません。』

とりあえずあそこで未だに呆けている使い魔に話しかけてみてはどうでしょうか?。」

「使い魔?。」

『簡単にいえば魔導師の使役する一種の人造生物です。』

彼女はちがうようですが…。ようはこの子の従者ですね」

「なるほどな…、主従関係か。じゃあこの子の知り合いで間違いね
ーって事だ」

『はい。まず間違いないでしょう』

確信を持って言ったロックオンの言葉にデュナメスも間違いないだ
ろうと言う。

ロックオンは彼女の所へ歩きだそうとしたが……

「ん…？」

なにかを踏んだようなような気がした。

とりあえず拾ってみる。

青い宝石のような物だ。ロックオンは普通なら特に興味を示さずに
そのまま置いていくのだが、なぜかこれはここに置いといていいけ
ない感じがしてとりあえずデュナメスの指示を仰ぐことにした。

「デュナメス…。こんな物を拾ったんだが、どうすればいいと思う
？」

『……よくわかりませんが、これは持っていたほうがいい気がします。とても危険な感じがするんです』

「ああ……なんとなく俺もそう思ってたんだ」

ロックオンは険しい表情でその 青い宝石を睨み付けているが……

……

「あゝ、やめだやめ……。考えるのはあんまり得意じゃねえんだ……」

……」

そう言っつていつもの穏やかな雰囲気に戻し青い宝石をポケットに入れる。

こんどこそ気を取り直したように歩きだした。ロックオンは背中では眠っている少女を起こさないように慎重に未だに呆けている女性の所へと向かった。

「なあ…そのあんた」

ロックオンはフェイトの使い魔…アルフに話しかけた。

「っ…!!…あ、あんたフェイトは、フェイトは大丈夫なのかい!？」

アルフはロックオンの問いで我に帰ったのかかなり焦ったように聞いている。

「大丈夫だ…。命に別状はねえよ」

「そ…そうかい。よかった」

アルフは心底安心したように、息をはく。

「だが少し怪我をしている。すぐに手当てをしないと……」

ロックオンは少し申し訳なさそうな感じでアルフに言った。

「本当だ……。すぐに家に戻って手当てしないと……」

「俺も手伝っていいか？　こういうのは人数が多いほうがいいしな……」

そのロックオンの言葉にアルフは少し考える。フェイトを助けてくれたとはいえ完全に信用は出来ない。

この男は魔法を使っていた。

それにあの強さ……はつきり言って脅威である。

しかし管理局の人間とも思えない。まだ子供だし、何より雰囲気がそういう感じじゃないのだ。

なんか誰とでも仲良くなれそうなそんな雰囲気である。

だが一応聞いておいたほうが　いいだろう。

「あんた…管理局の人間かい…？」

「管理局？　なんだそりゃ？」

アルフは警戒したように聞いたがロックオンはすぐに聞き返してきた。

「悪いけど、気づいたらここにいたんでね。　その管理局がなんなのか以前にここがどこだかもわからねえよ」

ロックオンはやれやれと首を振りながら言う。
とても嘘をついているようには見えない。

逆に困ったような、疲れたような表情をしている。
この表情を見るにおそらく本当なのだろう。

しかしアルフはさっきの言葉に少し考えると一つの仮説を立てた。

「…もしかしたらアンタ、次元漂流者かもしれないね」

「次元漂流者？」

「何かの拍子で別の世界から跳ばされちゃった奴の事さ」

そう言われた後、ロックオンは少し考え込む。

「オイオイ…マジかよ…」

ロックオンはそれを聞いて少し落胆したがすぐに元に戻り気になっていることを聞いてみた。

「なあ…その次元漂流者っていうのは体も若返ったりするの？」

「ハア？ 何言っただいアンタ……。人が若返るわけないだろ」

「（そりゃそうだ）」

ロックオンの問いにアルフは呆れたように返した。

ロックオンも内心ではあり得ないと思っただけらしい。

実際に体が若返ってしまったているのだが、こんな話をしてても信じてもらえるとは思っていないので、この話題はこれで終わらせることにした。

「それよりも、早くその子の手当てしないとな……で、俺も行っていいの？」

「……まあアンタが嘘をついてるようには見えないし、一緒に手当てしてくれるっていうなら止めないよ」

「サンキュー。他にもいろいろ聞きたいことがあったから……助かるぜ」

「じゃあ行くよ。 フェイトをしっかり連れてきておくれ」

アルフはそう言っていると歩きだした。

「りょくかいつと」

ロックオンもバリアジャケットを解除し歩きだした。

ちなみにバリアジャケットは、ロックオンが解除するイメージをしたら解除された。

ロックオンはアルフの後ろを歩きながらあることを考えている。

「（よくわかんねーけど、異世界か……、とりあえず頑張ってみるか……」

ロックオン・ストラトス……ニール・ディランディは異世界で新たな一歩を踏み出した。

第4話 初めての友達

「着いたよ、ここだ…」

歩くこと数分、アルフに連れられたロックオンはフェイトやアルフが住んでいるマンションに到着した。

「なかなか疲れたぜ…」

アルフが到着したことを伝えるとロックオンは疲れたというようにアピールする。

だが、疲れている様子はまったくくない。

いつもの飄々とした態度は崩すことはなく汗を掻くどころか息一つ切らしていない。

「アンタ：すごいね、フェイトを背負って歩いているのに息一つ切らしていないなんて…」

アルフは至極当然の疑問を口にする。

目の前の少年はフェイトと同じ年くらいだろう。

体格がほとんど同じなのでだいたいそうわかる。

しかし、目の前の少年はフェイトを楽に背負っている。

自分に同じ体格の人を背負って歩き、息も切らすなと言われると無理と言い切れる。

だからアルフはどうしても気になり聞いてみたのだ。

「…まあ体は昔から鍛えているんだ。力には自信があるぜ…」

ロックオンはいたって普通に答えたつもりだがどこかバツが悪そうである。

「そっかい…」

アルフはロックオンの態度を見てこれ以上聞こうとはしなかった。今の反応を見るに答えづらいことなのだろう。

人には聞かれたくないことが1つや2つあるものだ。だからこれ以上追及はしない。

アルフはこの話はこれで終わりというように無言でマンションの中

に入っていた。

ロックオンもさっきの話は自分自身疑問に思っていることである。

とりあえず適当に答えておいたが気になる事には変わらない。

「ったく、どうなってやがんだか…」

そう言ってロックオンはアルフが入っていたマンションを見上げた。

よく見るとなかなか良いマンションである。
そんな事をしみじみ思っているとアルフから呼ばれた。

「何やってんだい、早く来なよ！」

「おっと…そうだったな」

ロックオンはアルフの少し大きめの声に我に帰ると、ロックオンも中に入っていた。

ロックオンは今、ソファでアルフと向かい合っている。

フェイトの治療はアルフと協力して直ぐに終わらせた。

ロックオンのあまりの手際の良さ、治療のうまさにアルフが驚いたり、フェイトがロックオンの背中にしがみつかなかく離れてくれなかったのはまた別の話。

フェイトは今、布団に寝かしている、治療が終わった後、ロックオンが運んだのだ。

「まずはお礼を言う。フェイトを助けてくれて本当にありがとう……」

足を組んで座っているロックオンに、アルフは頭を下げて感謝した。

その感謝の言葉見るにアルフは本気でロックオンに感謝しているの
だろう。

こんなに感謝された事があまり無いロックオンは気恥ずかしそうに
頬を掻いた。

「おいおい、目の前に危険な奴がいたら助けるのは当たり前じゃね
えか……それに…俺もそいつに助けられたんだ。それであいこに
しねーか？」

「そうだったのかい…それでも感謝してもしきれないよ、何かお礼
を…」

「おいおい、いらねえよ、気持ちだけで充分だぜ」

アルフの言葉にロックオンは苦笑いでそう言う。

「それより、あの化け物はいったいなんだ？あんな物、空
想の産物だと思ってたぜ…。それにいきなり魔導師とか魔法とか言
われてもピンとこねーし…」

ロックオンは疲れたように溜め息を吐きながら言った。

「そういえばアンタ、次元漂流者だったね。けど、なんでデバイスを持っていたんだい？」

「わからねえ。何故か首にぶら下がって後はコイツの指示に従ったんだからな…。デユナメスはなんかわかるか？」

アルフの問いにロックオンはわからないと返す。

あの時の事を思いだしながらデユナメスに聞いてみる。

『すいません。私も気がついたらこうなっていました』

「……………そうか」

デユナメスの言葉にロックオンは難しい顔をする。

だが、わからない事はわからないので、直ぐに切り替えアルフに視線を向けようとしたところで……………

「う…う…うん……………」

「……………」

後ろからフェイトの声が聞こえた。この声に反応したアルフが直ぐにフェイトのもとに向かう。

「フェイトっ！！ 気がついたのかい！？」

アルフは涙目でフェイトに聞く。

フェイトは少し周りを見渡すと笑顔でアルフに返す。

「…うん。もう大丈夫…。だけど家で…？」

「あいつが運んでくれたんだ。フェイトの治療も手伝ってくれて…」

アルフはロックオンの方を向きながら言う。

「あなたは…確か……………」

フェイトは思いだした。目の前にいる少年を。自分が助けて、そして助けられた少年の事を。

「一回やったが改めて自己紹介だ。」

俺はロックオン・ストラトス。成層圏の向こう側まで狙い撃つ男だ」

ロックオンは何時もの調子で、昔刹那に言った時のように自己紹介した。

「ふふっ……」

「……何で笑う？」

「ごめんなさい。」

ロックオンってなんだか面白い人だと思って」

「おいおい、初対面の人にそりゃねえだろ……まあいいか……」

ロックオンの自己紹介にフェイトからつつい笑いが増えてしまった。

ロックオンの自己紹介ははっきりいって子供には分かりにくいが、精神年齢が高いフェイトには理解できた。

凄く自信満々に、真顔で有り得ない事を言っているのだ。

フェイトにはそれが面白くて、自分を助けた時とのギャップが激しすぎてつつい笑ってしまったのだ。

ロックオンはいきなり、笑ったフェイトをジト目で見るがすぐに諦めた。

フェイトの笑顔を見てると怒る気が失せたのだ。何故だかはわからないが。

「（フェイトがあんなに楽しそうに笑うなんて…）」

アルフはフェイトとロックオンの会話を聞いていてそう思った。あんなに楽しそうなフェイトは初めて見た気がする。

それだけフェイトはロックオンと楽しそうに話しているのだ。

そんなことを考えていると何時の間にかフェイトの自己紹介になっていた。

「私はフェイト、フェイト・テストロッサです」

「あたしはアルフだ」

フェイトとアルフは自己紹介をする。

実に簡単な自己紹介なので2人とも話すのはあまり得意じゃないのだろう。

「それじゃあフェイト、アルフ、聞かせてくれないかこの世界の事を……」

ロックオンは急に真剣な表情になり2人に言った。

アルフはフェイトにロックオンが次元漂流者だということを話すと、そのまま話始めた。

ロックオンは聞いた。

管理局、次元世界、ミッドチルダの事。

そしてここが地球の日本だということ。

魔法のこと魔導師のこと、そしてジュエルシードのこと。

正直信じられないことばかりなのだが、この2人が嘘を吐いているとは思えないので、いちおう信じる事にした。

あらかた話し終わるとロックオンは疲れたように溜め息をする。

あまりにも凄い話で、頭が疲れてしまったのだ。

「（それにしても、ジュエルシードとかいうのを集めるためとはい

え、こんな子供……しかも女の子があんな危ねー戦いするとはな。
俺達の世界じゃ考えられねえぜ………ん？……ジュエルシード……
？」

ロックオンはふと何かを思い出すとフェイトに聞いてみた。

「なあ、ジュエルシードって、もしかしてこれか？」

ロックオンはデユナメスから戦った後に落ちていた青い宝石を出した。

「ロックオン！！　それだよ、ジュエルシード！！」

「あんだ、それをどこで！？」

2人が大声で詰めよってくる。

ロックオンは少し驚いたが、すぐに説明する。

「あそこに落ちてたんだよ……。とりあえず拾ってきたんだ」

「そういえば…ジュエルシードのこと忘れてた……」

ロックオンが説明した後にアルフは思いだしたように呟く。
フェイトの事で頭がいっぱいですっかり忘れていた。

「おいおい、……まあいいか、ほらよ」

ロックオンはフェイトに
何かを投げた。
フェイトは慌ててキャッチする。

「これって……」

「欲しかったんだろ？ やるよ」

フェイトがキャッチした物は、ジュエルシードだったのだ。

驚いているフェイトにロックオンは言う。

「だけど……いいの？」

「気にすんな、俺には必要ねえからな」

フェイトは未だに戸惑っていて、ロックオンにおずおずと聞くが、ロックオンは親指を立てながらあっけらかんと返した。

「……ありがとう、ロックオン」

「いってことよ」

フェイトは笑顔でロックオンにお礼を言った。

ロックオンも笑顔で返す

「おっと……俺はそろそろ帰るぜ。いろいろ話してくれてありがとうよ」

ロックオンは立ち上がりながら二人に言った。

それを聞いたフェイトの表情が少し曇った。

アルフはフェイトの微妙な表情の変化に気づいた。そしてフェイトの気持ちの変化も感じとった。

魔導師と使い魔は精神がリンクしているので、アルフにはフェイトの気持ちの流れが流れて来たのだ。

もっと話したい、一緒にいたいという気持ちを。

「……うん、一緒に話せて楽しかった。またね……」

フェイトは明らかに無理して笑顔を作りロックオンに言った。

アルフはどうにかしようと考える。

フェイトに寂しい思いなどさせたくないのだ。

「（マズイ！！　なんとかしないと……あ！！）」

アルフはあることを思い出した。

「あんた次元漂流者だろ？どこに帰るっていうんだい……？」

そう、ロックオンは次元漂流者なのだ。

帰る家などあるはずもない。

「どこって……野宿するに決まってるだろ？」

アルフの真面目な意見にロックオンは当然のことのよう野宿すると言っ。

「だ、だったら家に住みなよ。子供が野宿なんて危険過ぎるしね」

「……気持ちはありがたいが、そこまで世話になるわけにはいかねえよ」

アルフの提案にロックオンは真面目な顔でそう言う。どうしたものかとアルフが考えているとフェイトがロックオンに言った。

「ロックオン、私たちはそんな事気にしないから」

「……けどな……」

フェイトの言葉にもまだ渋るロックオン。
そこまでされると申し訳なくなるのだ。

アルフは最後の手段とばかりにロックオンに近付くと耳打ちした。

「頼むよ……あんなに元気なフェイトは久しぶりなんだ」

「……どういう意味だ？」

「最近元気なくてさ、食べ物もほとんど食べてくれないんだ、あんな」とフェイトは楽しそうなんだ。だから……」

「わかった」

アルフの泣きそうになりながらの言葉を途中で遮りロックオンは言った。

「俺が必要だっていうなら喜んでお世話になるぜ」

それを聞いたアルフとフェイトは笑顔になる。

「ロックオン、ありがとうー！」

「おいおい、世話になるのはこっちだぜ？」

ロックオンは呆れながら言う。

「そんじゃまあ……よろしく頼むぜ」

そう言ってロックオンは手を差し出す。

「えっ？」

いきなりのことです惑うフェイト。

「握手だよ、握手」

「う…うん、よろしく」

フェイトはロックオンの手を握って挨拶した。

「そうだ、俺の本名はニール、ニール・ディランディだ」

「えっ、じゃあロックオンって？」

「ロックオンはコードネームだ、これからダチになる奴にコードネームは失礼だからな」

「ダ…ダチ…？」

ロックオンの言葉にフェイトは戸惑っている。

「嫌か……？」

ロックオンは少し落ち込んだ感じで聞く。
心なしか不安な表情をしている。

「ち…ちがうよ！ 嫌とかそうゆうのじゃなくて、こっぴつこっぴつって初めてで……どうしていいかわからないんだ……」

ロックオンの言葉にフェイトは焦りながら返す。

「実は俺もだ」

「……え？」

「俺もいろいろあってな、友達なんかいたことないんだ」

そう、ロックオンは両親を失った後、自分とライルが生活するためにずっとスナイパーをやってきたのだ。ソレスタルビーイングは友達というより仲間という感じである。

フェイトも人見知りで内気な性格で、アルフも友達というよりお姉ちゃんという感じだ。

お互いに友達という単語が新鮮なのだ。

「私、ロックオ……じゃなくて、ニールと友達になりたい。だけど、友達ってどうやってなるか……」

「……そうゆうのって、どうやってなるかじゃなくて自然となるもんなんじゃねえか？」

ロックオンはフェイトに静かに言う。

「お互いがなりたいてって思ってたんなら、それで充分じゃねえか」

ロックオンは笑顔になってフェイトに言った。

その言葉を聞いて、今まで黙っていたアルフが2人に言う。

「そういえば……困った時に助け合うのが友達って聞いたことあるような……」

アルフの言った言葉でフェイトは納得した。

自分とニールは既にお互いに助けあっている。
友達というのは困った時に助け合う存在。

それなら自分の答えは決まっている。

「わかった。改めてよろしくね、ニール」

「おう、よろしくな」

改めて2人は挨拶した。さっきよりもスッキリした顔をしている。
フェイトは余程うれしいのか少し涙を流している。

「フェイト……」

アルフはそんな2人を見ながら微笑んでいる。

そして、ロックオンがフェイトから離れるとアルフに近付く。

「あんたもよろしくな、アルフ。これから世話になるぜ」

「よろしく頼むよニール」

こうしてロックオンはフェイトと友達になった。

そしてしばらくフェイトの家に住む事になった。

第4話 初めての友達（後書き）

なんか最後のほう、何が言いたいかよくわからなくなった。

やっぱり難しい……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8973x/>

魔法戦記リリカルOO～不滅の狙撃手～

2011年11月24日19時48分発行